

第6分科会「機器」発表資料

「家庭と学校における機器の活用について」 学校と家庭との連携とその取組

(キーワード) タブレット端末・スイッチ・連携

岐阜県立関特別支援学校

P T A 会長 日比野 恵美

1 はじめに

現在、岐阜県の特別支援学校は20校あります。平成18年以降、岐阜県ではより居住地域に近いところに特別支援学校を開校する取組が進められ、たくさんの特別支援学校が開校されました。今年度も、新たに一校が開校されました。また近年、特別支援学校における総合化の取組が進められ、様々な障がいに対応していく学校へと変わりつつあり、肢体不自由を対象とする学校は13校になりました。

当校も平成27年度より病弱のお子さんを受け入れ、平成30年度をめどに高等部に軽度知的障害のお子さんの受け入れをしていく方向で検討されています。また、肢体不自由単独の学校である岐阜希望が丘特別支援学校では、今年度より高等部が開設されました。さらに、来年度は、職業教育に重点をおいた岐阜県内では初めての高等特別支援学校の新設が予定されています。

このように、様々なニーズに応じた特別支援学校の整備がなされていくことは、障がいのある子どもたちと共に歩む私たち親にとって、本当にありがたいことです。地域のなかに通える学校があることは心強く、安心して生活を送っていける基本になると思っています。

当校も、以前は県内の遠隔地から寄宿舎に入舎し、学校を卒業された方も多く見えましたが、そうした方も徐々に少なくなりました。それに伴い児童生徒数が年々減少し、今年度は66名となり、10年前の約半数になってしまいました。

しかし、少なくなっていくなかでも、小学部から高等部まで12年間を当校で学ぶお子さんも多く、保護者の多くは長い期間P T A活動に関わっています。また、お子さんのことで手一杯の状況でも、同じ学年、同じ地区の保護者同士の関係は深く、助言や協力を惜しまず取り組んでいます。

2 学校の概要

岐阜県立関特別支援学校は昭和41年に岐阜県における最初の肢体不自由児教育の学校として「県立岐阜養護学校」の名称で設立されました。平成14年に現在の4階建ての新校舎が完成し、昨年度創立50周年を迎えました。開校初期から高等部が設置され、現在小学部20名、中学部14名、高等部32名の計66名が在籍しています。また、寄宿舎を併設している学校でもあり、



男子13名 女子4名の計17名が集団生活を送っています。スクールバスで登下校する児童生徒は14名 保護者による送迎が35名です。

3 当校のPTA組織と活動

(1) PTA組織

当校のPTAは、本部役員と厚生、進路、広報、学年（小・中・高の各学部）に委員長）の4つの委員会で構成されており、全ての保護者がいずれかの委員会に所属しています。それぞれの委員会ごとに、毎年様々なPTA活動を計画、実施しています。また、児童生徒の余暇活動の充実、地域との交流、連携を進めていくため、居住地域ごとに「ホリデーサークル」という名称で、4地区に分かれた活動を行っています。

(2) 当校の主なPTA活動

- ・ふれあいまつり
- ・年末お楽しみ会（クリスマス会）
- ・成人を祝う会
- ・関特カフェ（環境整備活動）
- ・給食試食会
- ・進路研修会
- ・ヨガ講習会
- ・施設見学会



成人を祝う会

4 当校の機器に関する環境について

当校の機器に関する環境は恵まれている方だと思います。

平成14年に新校舎が建設された際にPCルームが作られ、7台のデスクトップ型パソコンが常設されました。その後、各クラスに1台ずつ授業で使うためのデスクトップ型パソコンが設置され、校内LANの環境も各教室に整備されています。また、普通教室だけでなく特別教室や寄宿舎等、子どもたちが必要とする場所に設置されています。さらに、必要があればノートパソコンを貸し出してもらえます。iPad等のタブレット端末も平成27年度に新規に31台導入していただき42台となり、余裕をもって使用できる環境が作られました。

このように、機器の環境はハード面に関しては充実していますが、学校の教育活動や家庭での使用状況を見てみると、十分な取組がされているとは言えません。

当校もパソコンが普及し始めた20年前には、関係機関から寄付をしていただき、大規模なパソコン事業を立ち上げ、ソフトの開発や学習への活用等の先進的な取組がなされていたこともあります。しかし、障がいの重いお子さんの在籍が多くなるなかで、専門的知識のある教員の異動等もあり、パソコンを活用した学習活動は少なくなっていくようです。

現在は、校外学習や修学旅行等の行き先をインターネットで調べる学習や自立活動のなかでタイピング練習等をする活動が多くなっています。また、iPadについても、カメラの代用として使用されていることが多いようです。

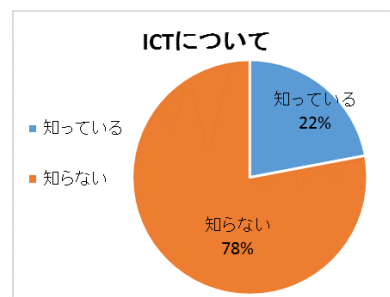


図1

5 保護者、職員アンケートから

平成27年7月に、家庭における機器利用の状況や利用の希望、学校への要望等「機器」に関する保護者向けアンケートを取りました。7月の時点では、ICTという言葉を知っている方は22%（13名・図1）と極めて少なく、情報提供の必要性を伺わせました。

新しい言葉は知らないけれど、支援機器使用のニーズは85%とたいへん高く（図2）、そのなかでも、現在主流のタブレット端末への希望は46%、パソコンが29%とデジタル機器へのニーズが圧倒的に高いことが分かりました（図3）。また、7割近い方が、タブレット端末を使用した授業実践を期待されていることも分かりました。（図6）

このように、支援機器への要望は高い状況にあります。実際に家庭のなかにおいて使用している保護者は27%（17名・図4）とあまり多くありません。スマートフォンを含むタブレット端末を所有している方は約半数（33名・図5）いますが、家庭で使用していない（使用できない）状況であるために、学校での使用の要望が高く、その気持ちが現在の学校における使用状況に対して、改善を望む思いとして図7のような数値として表れたのだと推測されます。（図7）

授業でのタブレット端末の使用に対して「思わない」「分からない」と答えた3割の方のご意見には、「遊び道具になってしまう」「本物で行えばよい」「使いこなせない」「卒業後継続して使えるかわからない」「具体的な使用方法が分からない」等がありました。

結局、このアンケートで明らかになったことは、「保護者はやってもらいたい気持ちは強くもっているが、やり方が分からなかったり、知識が少なかったりするため、自らの積極的な行動はできにくく、学校での使用を期待している。」という姿でした。

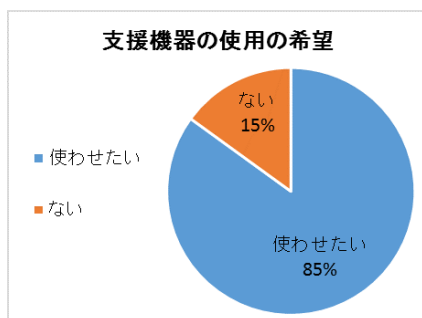


図2

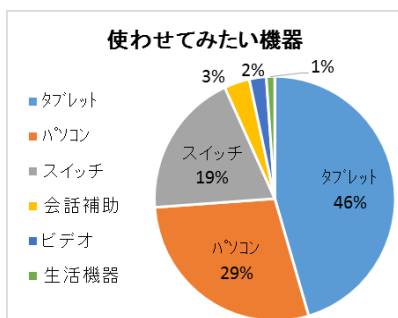


図3

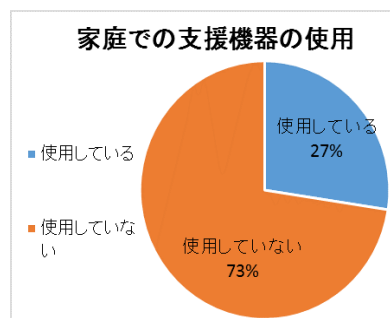


図4

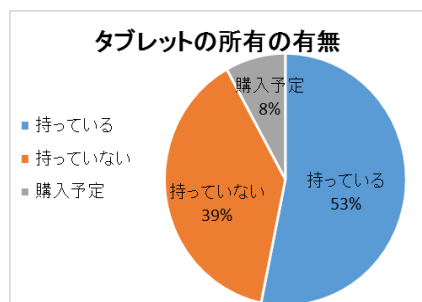


図5

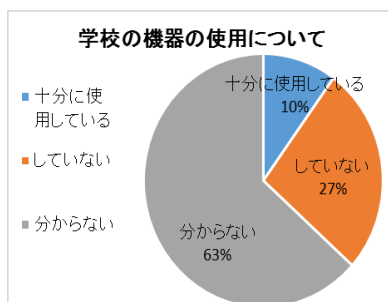


図6

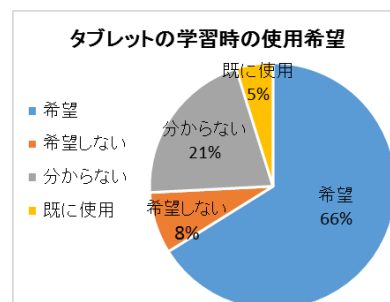


図7

6 学校現場の実情

(1) なかなか定着しない機器の使用

学校での機器使用の様子について63%の保護者が「分からない」、27%の保護者が「活用していない」と答えているように、学校の教育活動においてタブレット端末を含む機器の活用は満足できる状態になっていないととらえられているのが現状です。高等部1・2年生において、就学奨励費による購入補助があるにもかかわらず、多くの保護者は購入を見合わせています。購入が進まない原因には、学校でのタブレット端末の使用が行われにくい要因があるようです。



第1は、学校の先生が、タブレット端末を身近なものとして使っていない現状があります。スマートフォン等は多くの方が利用してみえますが、iPad等の大型ディスプレイのタブレット端末を持ってみえる方は数えるほどしかなく、また、授業での使用方法に関して「先生自身が知らない」「分からない」というのがあるように思われます。

第2に、タブレット端末の使用の多くが、アプリを用いたものとなりますが、学校のLAN環境やセキュリティの関係から、使いたいアプリがすぐに使えるわけではないことが挙げられます。(機動力だけならスマートフォンを使って音楽を流したり、動画や写真情報を見せたりすることの方が有効な場合が多くあるようです。)

第3に、「こうした機器に興味がある先生や使い方を熟知している先生が担任された時は、使ってもらえたけれど、担任が変わったら使わなくなった」という話をよく聞くこともあり、継続的な学習ができていない状況があります。

(2) 学校で行われている機器の活用

もちろん、学校が機器を活用した教育活動をしていないということではありません。個々の先生方の授業の中では、当たり前のように機器を使用した授業が行われています。朝の会でのビックマックススイッチを使ったあいさつ学習、虫眼鏡型カメラを使った観察記録の学習、作業学習での機械操作をするための棒スイッチの活用等、たくさんの授業で機器が多様に使われています。



小学部自立活動



高等部生活単元学習



高等部作業学習

(3) 情報提供の大切さ

学校の授業において有効に機器が活用がされているにもかかわらず、保護者のアンケート結果に見られるよう、保護者にはその使用状況がしっかりと伝わっていないこともあるようです。担任の先生を通じた懇談等で、自分の子どもの情報を得るだけで、学校全体や他学部の機器を使用

した教育活動について情報を得る機会が少ないからかもしれません。

また、保護者が家庭で使っている機器があっても、それが学校での教育活動において、同じように活用されていくことが少ないと言えます。これは、個人的に購入された機器と同様な物が学校にあることは少ないためであることと、保護者の方も機器に関して、学校へ情報を伝えることをあまりしないからかもしれません。

7 家庭での支援機器の活用の実例

何人かの保護者の家庭では、早くからタブレット端末や、コミュニケーション機器を使ってみえる方もみえます。

① 小学部3年生：iPad・スマートフォンを利用

療育施設へ通っていた時に、STの先生が訓練で使用していたことをきっかけに、スマートフォンやタブレット型ゲーム、iPadを家庭での訓練として使い始めました。アイコンも大きくなるので使いやすく、兄弟がやっていたゲームを今では自分でもできるようになり、とても喜んでいきます。また、タブレット端末のよさは、音声でも教えてくれるので、言葉の理解にもつながると思います。

② 中学部2年：視線入力機器 (Tobii Eyex)・レッツチャット・マイクロスイッチを利用

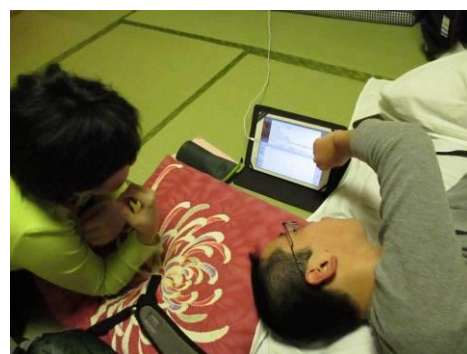
声を出す力も弱く、上肢の可動範囲も限られているので、何かしら自分から発信や操作ができるものがないかと悩んでいましたが、比較的安価で視線入力の機器が手に入ることを知り、家にあるパソコンに取り付けて少しずつ簡単なゲーム等をやっています。機器を活用するためには、練習が必要になってくるので、家庭だけでなく、学校でも使用できるとよいと思います。

③ 高等部2年：スーパートーカー・レッツチャットを使用

STの訓練を受けていた時に、訓練の先生から教えてもらい、家庭で使い始めました。本人が使用するには、多少時間がかかりますが、言いたいことが伝わるとうれしい表情を表してくれます。最近では家の中では、視線や仕草で伝えたり、家族が読み取ることが多いので、機器はあまり使用していませんが、学校の授業等では使ってもらえるとありがたいです。

④ 高等部3年：iPadを購入して使用

1年次は購入を見送りましたが、2年生になり担任からの勧めもあり、思い切って購入しました。家庭では本人用のパソコンもあり、どれだけ有効活用ができるか不安でしたが、連絡ノートとして使用したことで、学校での活動の様子等も写真、動画で見ることができるようになりました。また、本人のノートテイクとして、家庭や学校でも使用できています。修学旅行の時に携帯し、写真撮影、旅館から家庭へのメール送信等にも使用できました。



修学旅行の旅館で

⑤ 高等部3年：iPadを購入

1年次に補助があるということで購入しました。本人がどれくらい使えるか半信半疑でした

が、画面のスライド等、思っていたより使えていて、写真や本等を見ている時はよく集中していると感じます。しかし、学校へ持っていく機会も少なく、なかなか学校での使用ができていないことが気になります。

⑥高等部3年：iPad・棒スイッチを使用

高等部入学時にiPadを購入しましたが、使い方が分からずに1年間使用できませんでした。1年生の後半喉頭気管分離の手術をしたため、それまでわずかではあるが出ていた声を失いました。そこで、スイッチとビックマックをつないで、必要なときにスイッチを触って伝えることができるように機器をベッドにつけました。また、ビデオレコーダーとスイッチをつなげて、本人が操作できるように整えました。



自宅ベッドにスイッチ

8 家庭と学校の機器活用における連携の取組

(1) PTAの機器活用への取組

家庭での機器使用や学校での機器使用の状況を少しでも改善できないかと考え、PTAの活動として、いくつかの研修会を開催しました。

① iPad学習会（平成27年8月）

まだ、十分な情報がなく、学校での使用も先生の個人的な使用にとどまっており、保護者のタブレット端末所有数も限られていましたが、何か始めないとだめだという思いから、学校の情報担当の先生から話をしてもらった時間を作りました。たくさんのアプリのなかで、学習・ゲーム・音等に分けたコーナーを作り、子どもたちも一緒に触って、使ってみる学習会を開くことができました。個々のお子さんの障がいの程度によって、タブレット端末の利用への関心はまちまちでした。障がいの重いお子さんの保護者の方は、「何を使っても本人に感心がないから」という感想が多く、上肢の障がい比較的軽いお子さんのお母さんは、「スマホの方が携帯しやすいし、通信ツールとして十分」という感想を持ってみえる方が多かったようです。しかし、子どもたちが楽しそうにタブレット端末を触り、ゲームや学習アプリを使っている姿を見て、パソコンとは違う使い方があることを保護者の方も理解されたようでした。



② スイッチ活用学習会（28年2月）

学校の授業のなかでは、いろいろなスイッチを使って、子どもたちの活動範囲や作業への参加の方法を工夫した取組がなされていますが、学校で使っているスイッチが家庭にあることは少なく、学校だけの活動になってしまいがちです。そこで、実際に保護者の方にスイッチを製作してもらい、家庭で使ってもらえるような学習会を開きました。製作の時間に限りもあったので、一人一種



類のスイッチを持ち帰りました。タブレット端末とスイッチをつなぐ器具に関心を寄せられた保護者の方も何人かみえ、後日通信販売で購入されました。

家庭では、作ったスイッチとつないで利用できる物がなく、使用できずにいる方もみえましたが、スイッチを使ってみたことで、お子さんと関わる時間が多くなり、やりとりが増えていくことに期待感をもたれた保護者もみえました。

(2) 学校の中での取組

プロジェクト委員会という会のなかに、情報担当の先生を中心にしたICT教育委員会が立ち上げられました。先生たちへのiPad研修会やスイッチ製作会などを開催したり、ICT機器の管理、活用を行い、授業での使用がスムーズに行えるように取り組んでもらっています。

前述したように、今年度iPadをたくさん購入してもらえました。有効に教育活動へ活用ができるかどうかは、この委員会と先生たちの積極的な使用への取組にかかっています。

iPadの数が多くは、単純にたくさんのお子もたちが同時に利用できるわけで、今まで授業の時間の都合でなかなか使うことができなかった子どもたちにも、十分に触る時間を保障していくことができます。それだけでもうれしいことです。

さらに、何冊かのデジタル図書も購入しました。紙媒体では読みにくかった本も、図書室や教室で、購入したデジタル図書をパソコンやiPad等、それぞれの端末で見ることができるようになりました。家庭での使用も可能で、学校の教育活動と家庭での活動がICT機器を通して、多くの過程で共有できる可能性が広がります。

9 課題とこれからの取組 より多くの方に関心を持ってもらうために

わずかな期間ですが、この発表が当校に回ってきたことをよい機会ととらえ、なかなか関心が高まらなかった「機器」についてPTAとしても真剣に考え、活動をしてきました。2回行った学習会の参加者が十分であったとは言い切れませんが、わずかでも関心をもっていただけたのではないかと感じています。

こうした教育活動に関する部分は、学校が主体となって広がっていく部分が多く、機器の活用についても、学校の教育活動の環境が整っていかないと十分なことができない部分もあると思います。しかし、保護者の側からももう少し積極的に意見を出したり、PTA活動として主体的に活動していくべきだと感じています。卒業後のことを考えて家庭だけでなく、進路先の事業所等で使用することも視野に入れ、職場実習等の体験学習でも使ってみることも有効かもしれません。

家庭で使っている機器（学習に関わらず生活支援機器も含めて）の情報を保護者の間で共有し合うことで、もっと有効的な活用方法の広がりや新しいものへの関心が高まっていくと思います。新しい技術を敏感にキャッチし、学校や家庭へ取り入れていける手助けをPTAとして行って行ければと思っています。